

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 5 月 16 日現在

機関番号：13301

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2013～2015

課題番号：25580054

研究課題名(和文)「世界戦略」としての三島由紀夫

研究課題名(英文) Reseach of the Mishima Yukio, as a Gloval Strategy

研究代表者

杉山 欣也 (Sugiyama, Kinya)

金沢大学・歴史言語文化学系・教授

研究者番号：90547077

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：三島由紀夫は世界各国を旅した作家である。また、彼の作品とその存在は世界中に知られており、それは日本文学作家の中で突出している。そこで本研究では、焦点をアメリカとブラジルに絞り、三島が各地で何を見、何を書いたか、その際にどのような取舍選択を行ったかの解明を行った。同時に、世界の各地で三島はどのように研究され、翻訳されているかという点についても調査し、研究ネットワークの形成を志し、実体を解明した。

研究成果の概要(英文)：Yukio Mishima is a writer who has traveled the world. In addition, the presence and his works are known all over the world, it is noticeable in the Japanese literature writer. In this study, focusing on the United States and Brazil, Mishima what you seen in various places, what he wrote was carried out to elucidate if with what selection at that time. At the same time, Mishima was investigated and translated in many parts of the world .I aspired the formation of a research network, was to elucidate the entity, and succeeded it.

研究分野：日本文学

キーワード：三島由紀夫 ブラジル アメリカ 国際情報交換

1. 研究開始当初の背景

昭和の文豪・三島由紀夫に関して、その「国際性」が論じられることが多い。

三島は世界一周旅行だけでも生涯で3回行い、それ以外にも世界各国を旅した。行き先はアメリカ合衆国、メキシコ、プエルトリコ、ドミニカ、ハイチ、キューバ、ブラジル、ギリシャ、イタリア、イギリス、フランス、ポルトガル、スペイン、スウェーデン、ドイツ、エジプト、インド、タイ、カンボジア、韓国などである。ニューヨークで半年間のホテル暮らしを経験し、自作「近代能楽集」上演の機会を狙ったこともある。それらの機会を通じて培った英会話力を生かして海外の作家と交流を持った。

また、その作品は生前からドナルド・キンやサイデステッカーといった翻訳者にも恵まれて翻訳が進められ、多くの読者を獲得した。「近代能楽集」などの演劇も、生前から上演されている。それらが実際に読まれ、一定程度以上の影響力を持ったことは、ノーベル賞の候補者に擬せられたことなどで理解できる。このようにスケールの大きな活動をした作家は、日本には珍しいと言える。

「三島事件」と呼ばれるその死のニュースは世界を駆けめぐったが、これが世界を駆け回るためには、その事件のインパクトもさることながら、三島自身が既知の存在でなければならない。

しかしながら、なぜそれほどまでに三島は「世界」を求め、また、「世界」から受け入れられたのか、という点については、様々な論考があるものの、調査を踏まえた具体的な考察となるとまだまだ研究のとは口に立たばかりだと言える。

その大きな原因として、三島が生前に旅をした国・地域が大変に広く、その踏査が大変であること、また、三島自身による旅の記録である紀行文というジャンルが、小説や戯曲といったジャンルに比べて軽視されがちであり、三島研究においても同様であること、さらには、三島作品の翻訳の全容が掴みきれしていないことなどが掲げられるだろう。

研究者の交流についてはどうか。近年では国際シンポジウムも開催されるなど、研究者同士の交流も生じているが、一堂に会することの難しさもあり、全世界を網羅した三島由紀夫研究ネットワークが構築されているとまでは言い難い。

例えば南米における三島由紀夫研究の状況は日本ではほとんど知られていないし、彼らによってなされた翻訳が多数あり、また何冊か研究書もあることも、日本ではあまり知られていないといった実情である。

それらが、本研究開始以前の、本課題をめぐるところであると考へた。

2. 研究の目的

研究の目的は、1にも書いたように、三島由紀夫の国際性の理解にある。とはいえ、「国際性」という言葉は極めて曖昧で、具体性に欠ける。そこで本研究における目標として、二つの柱を立てた。

まず、三島由紀夫が実際に歩いた土地を踏査し、三島が書いた風景を確認し、その意味を掘り下げることである。これはその場所を描いた小説や戯曲だけでなく、紀行文も含めて、三島が風景をどのように叙述するのか、という点に注意を払い、言説分析の手がかりとする作業である。

次に、それらの土地で三島由紀夫に関心を持つ研究者や移住者らと交流を図り、彼らの観点を学んで、その知見を生かすことである。

自戒の念も込めて記せば、日本で日本文学を研究している者の誤解に、日本で行われている日本文学研究のみが日本文学研究であるというものがある。しかし、数多くの留学生を受け入れ、またすぐれた人材を輩出してきた日本文学の研究領域は、すでに世界に広がっており、むしろ日本で研究しているの方が井の中の蛙の状態にあるのかもしれない。

この二つの目標を立てることによって、以下のような視点の獲得を目指した。

すなわち、旅行地における三島由紀夫の視線を相対化し、三島がその地にある何をどのように書いたか、ということだけでなく、三島が何を書かなかったのか、ということにまで踏み込んで、紀行文や小説、戯曲を分析するということである。

もう一点、三島は旅先で見て、書く存在であったが、見られ、書かれる存在であった可能性もあるという視点である。それは例えば、現地で交流した日本人による証言や、現地の新聞報道などで三島がどのように取り上げられたかということである。この点に留意し、調査を行うことによって、やはり三島の視線を相対化することを試みた。

三島由紀夫の言説は、その魅力的な文体などのためもあって、強い磁場を形成し、私たちは彼の見るままに現地のありさまを受け止め、脳内で想像してしまう傾向がある。しかし、見られる存在を意識することで、三島の書きぶり、言い換えれば言語化のメカニズムを分析できるのではないか。そのようなことを最大の目標とした。

また、これらの研究内容については、現地における学会や講演などで現地の方々の意見を頂戴することを大切にしたい。それも、上記のような目標に関連する。つまり、日本語を母語とし、日本で生活している研究者として、自閉的になっていないか、自己検証していく態度が、この研究においては求められるからである。

3. 研究の方法

2とも重なるが、2で掲げたような目標に対して、具体的にどのような方法を用い、どのように研究を進めたかを、以下に記す。

まず、研究の対象とする三島作品のうち、紀行文を主軸に据え、モデル地などで旅行地を取り上げている小説や戯曲よりもそれを優先する。これは、1で記したように、三島的小説や戯曲に比して紀行文の研究は手薄であるということもある。また、紀行文は日本文学の伝統的な有力ジャンルであり、その系統のなかに三島文学はどのように位置付けられるか、という点について関心もあったからである。とはいえ、最大の理由は、上記の点ではない。

紀行文は(小説などとは異なり)事実をありのままに描くものである、という理解を私たちは持っている。また、紀行文は、一般読者が容易に体験できない土地を体験し、読者の代わりに目となり耳となってその実像を伝えるものだ、という理解をも私たちは持っているように思う。いいかえれば、文学に求められるリアリズムを素朴な形で表現しているジャンルだという前提がある。

三島の紀行文は、そのような前提に逆らうかのように、複雑で晦渋であり、また具体的な情景描写よりも内面的な思惟の叙述を優先する傾向がある。それは三島文学の特質でもあるが、エンターテインメント系の作品などで極めて判りやすく描写を行うこともある三島だけに、紀行文というものに対するある種の批評性がそこにはあるように思われる。それらの意識を分析する必要があるだろう。

その際に一つのタームを自らこしらえた。それは「三島が見て書かなかったことは何か」という側面の分析を、「三島が見て書いたもの」の分析とともに行うということである。

また、これも2で記したが、現地の、いいかえれば三島が見た対象に属する立場からの視点を分析する。具体的には、現地研究者や現地邦人との意見交換や共同研究、現地メディアの調査などである。三島の強い磁場から自由な立場で分析を可能にするためであることも2に記した。

このような観点から、現地踏査を行う必要が生じる。そこで本研究においては、ブラジルをターゲットにした。

ブラジルは三島初の海外旅行でもある世界旅行の一環として、1952年1月27日から2月29日にかけて滞在した。より詳しく言うと、リオ・デ・ジャネイロ、サンパウロ、リンス(サンパウロ州)と移動し、ふたたびリオ・デ・ジャネイロを訪れ、有名なカーニバルを体験している。そしてそれは紀行文「アポロの杯」に描かれた。ブラジルは「アポロの杯」一つのハイライトをなしている、と佐伯彰一氏(『評伝三島由紀夫』1978年)らによって評されている。

ブラジルをターゲットにしたのはいくつかの理由がある。それはまず、アメリカやギリシャなど、他の地域に比して研究が手薄であったこと。これは三島がその感銘を壊さぬよう二度と訪れないと宣言し、実際に再訪しなかったため、その後言及する機会が少なかったこと、あるいは今日の私たちから見ても遠方にあるため、調査がむずかしいことなどに原因がある。しかし、二度と訪れないと三島が言ったほどの感銘の意味も私たちは分析しなければならないだろう。

また、ブラジルには日系社会が存在する。1908年の笠戸丸以来、多くの日本人移民が移住し、現在でも世界最大の日系コミュニティを形成している土地である。そこにはサンパウロ大学鈴木悌一図書館、移民資料館、サンパウロ人文科学研究所などの研究機関があり、また、日本文学を研究している多くの研究者や実作者がいる。それらの資料の調査や交流を通じて、先の目標についての知見も得られるであろうこと、また、現地での三島由紀夫に対する高評価などについて留学生などから聞いていることによる。さらに、三島と交友を結んだ多羅間俊彦氏にサンパウロでインタビューすることもできた。

その結果として、ブラジルにおける学会発表や講演の形で自らの考察を発表し、そこで議論することができた。

その他、研究期間内に機会を得て、アメリカ合衆国についても考察と調査、そして講演形式での成果発表を行った。アメリカについては、なにしろ死に際しての有名な「檄」の中で言及があるように、戦後の日米関係を反映して、様々な言及があり、また、三島の滞在中も長期かつ広範囲である。限られた時間と資金の中で踏査は不可能と考えていたが、リーハイ大学(ペンシルベニア州)より招待講演の機会をいただいたため、それに先立ってニューヨークのみ踏査し、その結果も踏まえて考察を行い、講演の形で報告し、リーハイ大学その他アメリカの文学研究者たちと意見を交換することができた。これについてはさらに考察を深めていくつもりであるが、機会を得て、調査考察のきっかけを与えてくれたリーハイ大学への感謝の言葉を記しておきたい。

また、アメリカに付随して、日本国内におけるアメリカ、すなわち占領下沖縄と朝鮮戦争時の試射場があった内灘を対象に、考察を深めた。三島は世界を広く旅したが、その中には日本国内も含まれる。現在でもアメリカとの関係から大きな問題となっている駐留米軍の問題について、三島は比較的早い時期(私の見立てでは初の世界旅行の前後)から関心を持っていた。これについて考察することは、本研究にとって重要であろう。それは、三島のみならず海外を旅したものが振り返るのは自らの国であり、三島は世界を見ることで日本を見つめ直したと考えられるためである。三島事件に至る三島のナショナリズム

ムの涵養に世界旅行の体験が影響している以上、その目で振り返った「日本の中の世界」（ここではアメリカ）を考察しておくことは絶対に必要な作業であると思われた。これについても、国内での講演や論文の形で公開した。

4. 研究成果

まず三島由紀夫とブラジルについて。三島はリオ・デ・ジャネイロ、サンパウロという大都市のほか、田園地帯であるサンパウロ州リンスも訪問しているが、リンスについては移動に時間がかかり、限られた調査期間内では訪問ができなかったことと、三島が訪ね、滞在した多羅間農園の多羅間俊彦氏からサンパウロ市内でインタビューが取れたことから割愛した。

まずリオ・デ・ジャネイロ調査において、重要な気づきがあった。それは、「アポロの杯」における三島の叙述に、「見て書かなかったこと」が存在していることである。例えば三島は市内 Quinta da Boa Vistaにある動物園を訪れた喜びを「アポロの杯」に記しているが、動物園を訪問したら確実に目にしたはずの国立博物館（旧王宮）について一切記していない。理由としては博物館内部まで立ち入らなかった、といった程度の理由かもしれないが、紀行文の記述が作者の恣意的な選択によってなされること、彼自身にとって重要な事柄が書かれずにほのめかされているのではないかということ、そしてそれは紀行文の本質的な問題として読者に隠されること、などを理解した。

そのような観点からリオ・デ・ジャネイロにおける三島由紀夫については、ジョン・ネイスン『三島由紀夫 ある評伝』（1976、新潮社）に書かれた当時の朝日新聞社海外移動特派員・茂木政のインタビュー内容に、三島の同性愛体験について触れられていることが改めてクローズアップされる。佐伯彰一が前掲書で「事実調べはともかく、三島作品のいわば内面的な証拠から、やはりブラジルが、三島におけるアルジェリアであったと認めたいのである。」と述べたような事態がここで生じるに至った理由も、リオ・デ・ジャネイロにおける実地踏査においてほぼ納得できた。

というのも、リオ・デ・ジャネイロの守護聖人が聖セバスチャンであり、そのアイコンが街中に溢れかえっているのがリオ・デ・ジャネイロの特徴だからである。

染料の原木として注目され、のちに国名の由来ともなったパウ・ブラジルの木を求めてこの地に侵入したフランス人をポルトガル人が撃退したのは一五六七年一月二〇日のことである。この日はカソリックにおけるセバスチャンの祭日であり、かつポルトガル王ドン・セバスチャンの誕生日でもあった。以来この地はサン・セバスチャン・ド・リオ・

デ・ジャネイロと呼ばれるようになり、聖セバスチャンはこの地の守護聖人として祀られるようになった。一月二〇日は今でもリオの重要な祭日である。そして三島由紀夫にとって聖セバスチャンは、「仮面の告白」（1949、河出書房）で自らの同性愛傾向を語る際に象徴化した、重要なアイコンである。

三島はそれらのことを「アポロの杯」では一切叙述しなかった。しかし、そのことに気がつかなかったとは考えづらい。そのような観点から、「アポロの杯」の中でも特に難解とされるブラサ・パリスにおける内的体験の叙述を分析した。

もう一方の大都市サンパウロについては、リオと比して叙述が少ない。その代わり、日系社会が発達していたサンパウロでは、複数存在していた邦字紙に動向やインタビュー、座談会などが掲載されている。三島は、サンパウロは「サムライが沢山いる」との言葉を遺してサンパウロを立ち去っている（1952.2.13 昭和新聞）が、それは日本人移民が少なく、開放的な雰囲気浸ったリオと、日本人移民や日本語メディアの視線を気にしてのびのびできなかったサンパウロとの差異を物語るものとして考えることができる。詳細はこれから出る論文（現在、出版社が決定している状態。2017年3月刊行予定）をお読みいただきたい。

さて、アメリカとの関係についてもここで触れておきたい。私の戦略として、アメリカそのものに対する調査と並行して「日本の中のアメリカ」における大きな存在である米軍の基地について考察を深めたことは2で述べた。ことに私の現在住む近くには朝鮮戦争時の米軍試射場とその反対運動で名高い内灘があり、この内灘と、現在でも基地問題を抱える沖縄について、それぞれ三島の小説「美しい星」「潮騒」の叙述をもとに分析した。これについては短い論文を発表し、さらに「グローバル時代の文学」（金沢大学国際基幹教育院教科書）の一章として発表したほか、学会発表にエントリーしており、今後も検討を重ね、長論文にしていく予定である。

さらに、これも2に前述したように、リーハイ大学の招きでニューヨーク調査と講演形式の発表を行うことができた。敗戦直後から三島事件に至る三島の対米観の変遷を追い、ことに半年間に及ぶニューヨーク滞在を記した「旅の絵本」（1958、講談社）の叙述の解明に取り組んだ。これについても今後ブラッシュアップし、発表していく予定である。

今後の展望として、三島における国際性の分析を進めることはもちろんである。2016年度にはマナウス（ブラジル）で開催される学会で発表を行い、また、フィレンツェ（イタリア）で開催される国際シンポジウムにおいて、イタリアに関しても考察を行う予定であり、それらを順次論文化していく。また、ブラジルにおける三島文学の受容について翻訳書の一覧データベースを作り、日本で紹

介したいと考える。これは本研究のもう一つの側面として2や3で記した「三島が見た対象に属する立場からの視点」を私自身に、また日本における三島由紀夫研究に対して提供したいと考えるからである。

なお、ブラジルと日本文学はとても深いものがある。本研究のスピノフ的に「南米を旅した作家たちの軌跡と作品の研究 相互交流の観点から」という研究課題を新たに立ち上げた。ブラジルを訪問した作家は三島由紀夫だけではない。戦前だけでも、石川達三、島崎藤村、堀口大聖と言った作家たちがブラジルを訪れ、また生活している。その考察に際しては、「相互交流」という語で代表させたが、受け入れるブラジルの側の視点を取り込んだ研究が必要になる。旅行者の視点は往々にして一方的で暴力的な場合もあるからだ。今後、三島由紀夫と同時にこのテーマについても研究を深めていく予定である。

なお本研究においては多くの方々の協力・助言を得た。

ブラジルにおいて、サンパウロ大学、ことに Neide Hissae Nagae、Lica Hashimoto の両氏。また同大学で開催された国際シンポジウムの参加に際しては Leiko Matsubara Moraes 氏（サンパウロ大学）、松田真希子氏（金沢大学）のご尽力を得た。リオ・デ・ジャネイロ州立大学、ことに北原聡美氏、Elisa massae Sasaki 氏。アマゾナス連邦大学、ことに内ヶ崎留知亜氏。名前は掲げないが、これらの大学では他の先生方や学生たちにもお世話になった。サンパウロ新聞社のエレナ水本氏、鈴木雅夫氏。また、サンパウロ石川県人会、マナウス石川県人会、西部日伯友好協会の皆様。そして多羅間俊彦氏。そのインタビューに際しては森幸一氏（サンパウロ大学）にご仲介いただいた。さらにサンパウロ人文科学研究所、ブラジル日本移民史料館。人文科学研究所で知遇を得た長尾直洋氏には企画したラウンドテーブルの発表者もお引き受けいただき、歴史学の観点からご発表いただいた。アメリカにおいてはリーハイ大学、ことに山崎信子氏の協力により、研究が推進できた。またこの間、金沢大学大学院生の Rodlfo Rocha Silveira Diniz 氏には全面的なサポートをいただいた。その他、多くの方々のご助言ご助力によって本研究は成り立っている。この場を借りて感謝の意を伝えたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1 件)

杉山欣也、神島・沖縄・内灘-三島由紀夫の旅する海辺、日本近代文学、査読無、93 巻、176-182

〔学会発表〕(計 7 件)

杉山欣也、三島由紀夫はアメリカをどう描いたか、Modern Languages and Literatures International Scholars Lecture Series、2016 年 3 月 23 日、リーハイ大学(アメリカ合衆国、招待講演)

杉山欣也、ホドフ・ホーシャ、長尾直洋、ブラジルにおける日本語文学とメディア、日本文学協会第 70 回大会、2015 年 11 月 15 日、成城大学(東京都世田谷区、ラウンドテーブル)

杉山欣也、三島由紀夫が見て書かなかったブラジル、国際語としての日本語に関する国際シンポジウム、2015 年 8 月 12 日、サンパウロ大学(ブラジル)

杉山欣也、書きかえられるブラジル-三島由紀夫『アポロの杯』の問題性、2015 年 7 月 11 日、第 8 回金沢大学人文学類シンポジウム、IT ビジネスプラザ北陸(石川県金沢市)

杉山欣也、三島由紀夫がブラジルで見たもの・語らなかつたこと-日本人作家のブラジル体験こと始め、2014 年 11 月 7 日、州立リオデジャネイロ大学(ブラジル、講演)

杉山欣也、夢幻能の不在-三島由紀夫『近代能楽集』、2014 年 10 月 31 日、サンパウロ大学(ブラジル、講演)

杉山欣也、De Kanazawa ao Brasil-oTeatro No de Yukio Mishima、2013 年 12 月 16 日、Ciclo de Palestras Estudos de Lingua e Litterure Japonesa、サンパウロ大学(ブラジル、講演)

〔図書〕(計 2 件)

杉山欣也 他、グローバル時代の文学、金沢大学、2016 年、85 (75-82)

杉山欣也 他、21 世紀の三島由紀夫、2015 年、326 (62-70,286-289)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

杉山 欣也 (SUGIYAMA, Kinya)

金沢大学・歴史言語文化学系・教授

研究者番号：90547077